

# 地元で根ざした物語を創作

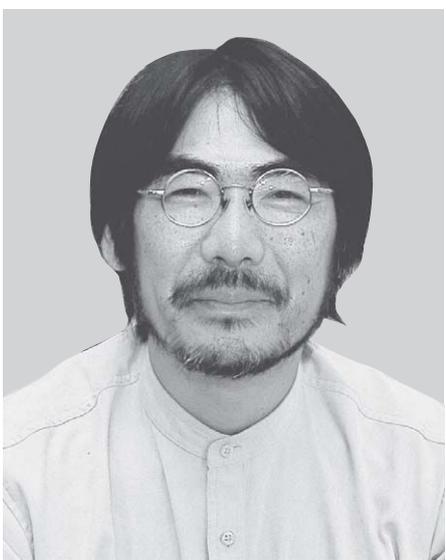
児童文学作家

並木美路(鈴木一幸)さん

「エンデ森に春が来て、マー」という名の雌ガラスとヤーという名の雄ガラスとのあいだに、ある日、五つの卵が産まれた。このエンデ森とは飯豊森のこと。わたしたちになじみ深い方言も出てくる北上を舞台にした童話『エンデ森のカー』の一文です。この童話は児童文学作家、並木美路さん(口内町)の作品です。並木さんの童話は実話がもととなっていて、ほかに『氷つばめの秘密』や『雪うさぎの冬』があります。どれも北上を舞台にした童話です。並木さんが童話を書くよう



わたしたちになじみ深い方言も出てくる北上を舞台にした童話『エンデ森のカー』



になったきつかけは、子どもものころから読んでいた宮沢賢治の童話といい、読んでいるうちに自分だけが書ける童話があるのではないかと、書き始めたのが20歳のとき。しかし、当時は書き上げることができなかつたそうです。そして、インドを4カ月間旅をし、お互いに助け合う姿を見て勇気づけられました。帰国後、土木作業員として働いた思い出を書いた『もぐらの日々』(『エンデ森のカー』に併録)を出版社に投稿。それが目に留まり、『氷つばめの秘密』を出版することになりました。

並木さんは学生時代は作文などを書くことは好きでなかつた。と笑い、「子どものころから生まれ育った場所で、地元で根ざした童話を書きたい。実在の地名を使ったのは、童話はファンタジーだが、実際の地名を使うことで親近感を持つてもらい、身近に感じてもらいたい」と話します。

今後は、環境問題をテーマとした童話を書きたいと話し、「自分が書かなければならぬものを書きたい。子どもだけではなく、多くの人に楽しく読んでもらいたい」と話していました。

## 数字に見る北上 ⑧

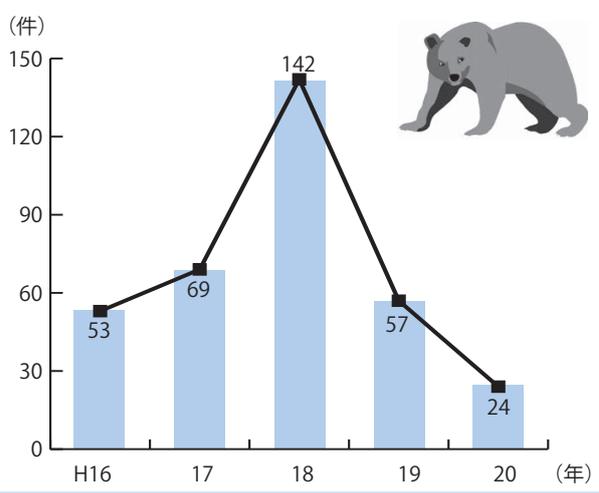
平成20年度のツキノワグマ目撃件数です。過去5年間で一番少ない件数ですが、人がクマに襲われる被害が2件ありました。

年によって大きく件数が変わりますが、農作業などにツキノワグマの目撃が報告されています。これからは夏休みでキャンプ、バーベキューをする機会が増えます。生ごみなどは絶対に捨てないようにしてください。残飯などの味を覚えたクマは、人里周辺にまで接近し被害を与えることがあります。

山や森に入るときや農作業をするときにはクマの出没に十分注意し、鈴やラジオなど音が出るもので自分の存在を周囲に知らせ、万が一遭遇した場合も慌てず、騒がずクマを刺激しないようにしましょう。

24件

ツキノワグマ目撃件数(生活環境課調べ)



でんじろう先生のカッコいい! 科学おもちゃ  
米村でんじろう

カレーのひみつ ひさかたチャイルド

新・子どもたちが地球を救う50の方法

同制作委員会

からほり亭で漫才! 藤田 富美恵

ガーデンツリーお手入れ便利帳 高田 宏臣

中小企業は進化する 中沢 孝夫

匠道 イチローのグラブ、松井のバットを創

る職人たち 松瀬 学

《7月の新着本から》



『無告のうた  
歌人・大西民子の生涯』

川村 香平 著  
角川学芸出版

無告の歌びと大西民子。その魂を故郷盛岡へ迎え入れる契機となった、岩手日報社発行『北の文学』入選作を含む、本格的な大西民子鑑賞研究。



『ハンミョウ』

栗林 慧 写真  
日高 敏隆 総合監修  
アスク

色鮮やかな模様をした、とても活発な甲虫、ハンミョウ。体のつくりや、オスとメスの交尾、産卵、幼虫から成虫への成長の様子など、その生態を写真で詳しく解説。

きたかみ物産館



大豆の豊かな風味が楽しめる  
ふしうし(臥牛)とうふ

臥牛とうふ工房

臥牛11-33-1  
(小原) ☎66-5809

▶▶(40)



(左)小田島美保子 さん  
(右)佐藤 恵美子 さん

地元産の大豆で安心安全  
毎週水・土曜日だけの生産。昔ながらの製法で、北上産の大豆を使用して作られている木綿豆腐。大量生産の豆腐とは異なり、ズッシリと重みを感じます。大豆本来の風味をそのまま生かしているんです。市内の学校給食センターへの出荷がメインですが、同工房(午前8時まで)と産直施設「あぜみち(流通センター)でも購入することができます。

※工房で購入する場合は、2日前までに代表の小原孝也さんへ予約してください。

綿毛の飛ぶころ

サツキが満開になるころ「おきな草」の花が綿毛になった。梅雨入りの前の晴天の空に、フワフワと飛んでいくのだろうか。タンポポの花が冠毛になり、風に乗って四散していく様子を連想するのだが、飛んでいる姿は見えない。タンポポのように飛んでいって増えるほしいと思うのだが、今年もプランターの株以上には増えてはくれなかった。

しまうようだ。季節の変わり目、両親は庭の古いクリの太木を見ては懐かしそうに「この木は叔母の誕生記念」、ヒオウギの花を見ては「この花は祖母が好きだった」と教えてくれた。衰退し絶えそうになると跡継ぎを植えていた。保護するためか、草取りに精出して庭に除草剤は使わせなかった。たかが野生のタンポポであっても、古くからある希少のものが増やしたいと思うのは、そんな思い出のせいかもしれない。父が大切にしていた日本タンポポ、母が喜んでいたおきな草の変化。この季節、庭の草取りをしなから思いに浸った。

タンポポの花言葉は「幸福を知らせる花」という。たくさんのお幸せを知らせてほしいのだがなかなか難しい。自然力に依存するのみで努力なしでは幸福はやってこないのだとの教えかな。額の汗をぬぐいつつ晴天の空を見る。やはり綿毛は見えなかったが、両親の笑顔が見えたような気がした。

